

## 窓外

薄い紗のかかった二次元の世界を

あたかもさまようように続く生活<sup>くらし</sup>

あなた方の感情など僕にはこれっぽかしも感じられず  
ましてや社会など存在しないも同じこと

遥か遠くで僕とは無縁に動き回る世界

まるで顕微鏡から覗く、微生物の運動する世界のような・・・  
それら微生物が生物界の底辺にあると知っていても  
それが一体全体僕にとってどんな意味があるというものでもあるまい

堆く積み上げられたモノどもに埋もれて

自らの倦怠を、自ら無機的な興奮へと仕向ける毎日  
あたかも他者であるかのような自己と向き合う日々  
己という存在そのものが何かの創造物であるかのような錯覚

すべては私という部屋の窓外に広がっているだけのもの  
この部屋の窓や扉を叩く者に、私は見えないのだ  
僕自身も、この部屋の中を見せるなんて真っ平だ  
自ら交雑など求める奴の気が知れない

あらゆる意味で距離の縮まりすぎた窮屈な空間では  
現に様々な要因で衝突と侵害が生じているではないか  
今、必要なのは、空間を超えた距離と自己保存であるはずじゃないか！  
ああ、それを「壁」と罵る調和論者などに何がわかるのだ

僕自身の世界が容易に踏み倒される、そのことを  
お前たちは「社会」という名のもとに擁護する  
そんな実存破壊の権利など僕の知ったことが  
この部屋に一步だって踏み入れさせるものか・・・

見たいと思えば、世界の裏側まで目にすることができ  
聞きたいと思えば、死人の声さえ聞くことができる  
しかし、僕はうんざりしているのだ  
それら全てが閉じられ、どうどうめぐりをしている感覚だ、と

今や孤独という宝石さえ不純物で濁らされ

どんな小さな部屋へも、盗撮と盗聴が忍び込み  
情報として流出し、晒し者にされてゆく  
ああ、社会というやぶ医者が施す治療などもうたくさんだ

だいたい、この硬直した空気を感じていないのか？  
あらゆる自由を認可したおかげで生じた可能性の硬直化を！  
新たな拘束と閉塞、そして二次元的な空間を！  
飛翔する場所などどこにあるというのか？

おお、息の詰まるような世界！  
この世界の外側には何もないのか  
僕が胸の奥深く吸い込むことができるような清々しい空気は？  
そして、遥かにかすむような眺望は？

今や残されたのは隠者となること、それのみだ  
ああ、僕の道連れとなってくれる者はどこにも居ないのか  
これほど声高な自由の謳歌の中にして  
ただのひとりも・・・？

僕は、そっと窓のガラスを指先で撫でてみた  
そしてしまいには、がんがんと叩いてもみた  
その手ざわりは、ひんやりと冷たかった

窓外では、社会が嬉々として運動していた  
まるで顕微鏡下の微生物のように  
自由を謳歌していた・・・

おお、誰か、僕を助けてください  
この非社会的な悟性にも友情は必要なのです  
おお、誰か窓の中をのぞいてください

(2004.10.11)